

中国史いろいろ 皇帝の名前

戸田奈緒子

本年、2019年は上皇陛下から天皇陛下への譲位に伴う改元が行われ、平成が終わり令和が始まりました。現在、元号を使用している国は世界中で日本だけですが、元々は中国で前漢の武帝時代、紀元前140年に「建元」という元号が制定されたのが最初です。

古くは皇帝の即位時だけでなく瑞祥（めでたいしるし）や凶事が起こったりすると、人心一新のために改元していました。しかし、明の太祖である洪武帝朱元璋が一世一元の制を採用したことから、皇帝一代につき元号は一つとなり、それに伴い、皇帝は洪武帝、乾隆帝、等と清代まで元号+帝で称されるようになりました。ただし、この呼び方はあくまでも日本における通称であり、正式ではありません。本来、皇帝の崩御後に、功績に則って贈られる名を諡号といい、文帝、武帝、宣帝、等という名がそれにあたります。唐張守節が『史記』の注釈書である『史記正義』に引く、戦国時代に成立した『逸周書』の『諡法解』が、最初におくりなについて定めた書で、長く諡号選定の基準とされました。秦始皇帝により、臣下が皇帝を評するのは不敬であり、後の世に二世、三世と引き継ぐようにと一時中断されたものの、秦帝国が二世皇帝胡亥の代で実質滅んだ後（三世に当たる子嬰は秦王を名乗ったため）、漢代に復活されました。唐以降の皇帝は、世祖や高宗、玄宗等と呼ばれますが、これは廟号といい、歴代の先祖を祭るための宗廟に載せる名前前のことです。唐武則天以降、皇帝の諡号が追贈されることにより複雑長大になったこと（例：宋太祖趙匡胤の諡号は「啓運立極英武睿文神德聖功至明大孝皇帝」）、在位した皇帝が宗廟ではなく固有の廟を建てられるようになって、廟号で呼ぶことが通例となったためです。廟号は周の礼節制度を基につけられ、初代皇帝は高祖あるいは太祖、二代目は太宗、以降はある程度皇帝の業績を鑑みた一文字+宗、が用いられることが多いです。

先に、諡号には選定基準があると述べましたが、功績に基づくため、称揚する良い意味のものばかりではありません。暴君として知られる隋の煬帝の場、は「内を好み禮を遠ざ

くを煬と曰ふ」「禮を去り衆を遠ざくを煬と曰ふ」という悪諡です。他にも靈、厲、荒、幽、昏、等が悪諡であり、暴君や暗君につけられました。悪諡が存在するのは、死後に悪名を残さぬように行いを慎むべしとの趣旨だったのですが、王朝交代期や帝位を奪われた皇帝は、次の皇帝の正当性を示すために悪行が誇張されることが多々ありました。そのような本来の意図から外れる用い方をされたため、宋代には悪諡はつけられなくなります。

注意すべき点として、諡号にせよ廟号にせよ、皇帝の死後に贈られる名ですので、どんなに良い諡でも、生前にその名で呼ぶことはあり得ません。かといって、本名=諱を使うことは更にあり得ません。「帝」「陛下」と呼びます。そもそも諱は、士大夫層でも直接呼びかけるのは大変無礼なこととされましたが、一天万乗の君たる皇帝ともなれば、その一字を書くことすら憚られたのです。これを避諱といいます。対象は人名・地名・制度名等、あらゆるものに及び、似た意味を持つ別の字に置き換えられました。例を挙げると、最上位の爵位である「列侯」は元は「徹侯」だったのですが、武帝の名が劉徹なので列に変更されました。漢代の郷亭里選という官吏推挙制度に「秀才」があったのを、後漢光武帝の名が劉秀だったために「茂才」に改められました。唐太宗の場合は、世民、と使用を禁じられると困る名だったため、避諱を免ずる詔を出しています。ただ、唐代の版本によっては『史記』の「世家」が「系家」になっていたり、二十四功臣の一人である李勣が元の名を徐世勣といったのを、功績により李姓を賜った際に世民の諱を避けて名を一字に改めていたりしています。

中国の皇帝には呼び名がたくさんあってややこしいのですが、このように法則が存在することを覚えておけば、中国史関係の本を読む時に、混乱せずに済むでしょう。

■参考文献

岡崎由美, 王敏監修『中国歴代皇帝人物事典』(河出書房新社)

とだ なおこ (司書・管理運営課)